



夏古撰

自心



反古撰卷一

目録

仏舎利感得の人此夏
 他病不効利益此事
 無任福味及身之夏
 懺悔せよる罪の夏
 道念の忘れ架おれ夏
 城通明神の由夏
 俗之秘病氣味坂の夏



和号の奇物也

和名春時住行の坊也

魏仕た事

小西宗又市也

と

反古撰卷一

佛舍利感得の人也

昔は西の國より生蓮と云はる心所りし年
その佛舍利感得の心さうりて不空
三蔵の心所りれ舍利神れ文と唱て毎日
六百返の祈と地おなけりてねりて祈
し一二月十日ある年れ後天まらの智任を子の
佛廟よりりて子又精誠といひて
まをいし一二月十日ある年れ後天まらの智任を子の
おて世りて子又精誠といひて

このいふのと作りかゝりておぼろしく
かゝるいふとんれにあらざるはるゝ一むいの世を
しつて色白くたげさるゝの比二十二年斗
とんく一依たかか人か一正年ありううと
考ぐは金利もちをきんとおりのりは入
しをせやぶとあたらうくおそくお説を
おつて斯中なるは金利をたけり我々の
とくはうとやとらんは海と書くおつと後
をへんおはるゝかかか一いふおひておつ
先て書の後らるゝは新ぬおはるゝりなる
おの代書とらるゝお雷の塔の六七寸斗らるゝを

兵おや一お焼火の光りも及び海戸の光り
うく屋さあり先身のもの立て先く一は金
利十程斗お一なるては中お二つ一
ておぬくとしくは我の有協のゆ一やいす一由
さうその相とるゝぬとてたるうらうと金
彩色一は老はは金利一粒世のもの相とるゝ
おのひりりえこそとて後一たよりぬ感後押
かううりうぬ海原の海原はゆりてをも
いっなる人よとや一またを後おいつたも
お岩は何とやと難ぬるは後家か一ゆせば後
いたさるゝるゝか合せん人と後おこやられ

予等て恒む所あるべき寂靜と申すを以て
此の如き如く申す所あるべきも亦し
うして(四) 彼も見るべし聖人といふは
此の如きひいては亦かしく存され大徳あり
さうして人はさうされしはさうしては
おろしきなりしや成老も亦しをさうしては
予も此著書讀の身化さるべしとて生蓮の
を後にもれしつげてある所のれおき
さうしては人かしく人悟りしは舍利とて
てまたの子細能くさうしては
と此の人の信心ありしやさうしては

智の在家人をなれども其の信ありは感
びありしは絶ふは信の道の入りと功徳の
と説れん

地蔵不勒利卷の文

善心信好の妹あるの尼儀に地蔵
時修学院の僧正勝美の大家の兄を偏し
好い地蔵の實を唱てお祈りし
るふ不勒利大なるの善し地蔵も
くまもほふとて新をいし又曰信好の
以死すといふとてしるしむや
い不勒の善の先を備えし地蔵の

そをいひしる難き〜て中なるに田舎大田の人か
て川をいひし〜をいひし傳のゆる〜地をいひし
いれれ夫す入を相〜けお進たて〜行を
い傳我よ〜そお〜む大也むも〜はあぬ
者のい〜人するむとさ〜相お知入〜は
言子二人白言校を指らるる男大を遊ねむ〜
いぬ〜てあ〜さ傳お後〜中〜さ〜ては
まてゆ〜た〜とさ〜してあおる〜や〜け
〜あ〜う〜か地をいひ〜ま〜り〜あ〜初〜荒ら
〜〜〜助さや〜り〜地をいひ〜初の名使あ〜て
い〜て〜地〜離れ難〜と〜

平任頼師乃身之事

主平頼師の曰空寂をいひて自らと〜也身
を徳〜り〜れ〜知をいひてと〜と〜てあ
念を徳ふるあ〜ふ〜と文下田若〜是別止観修
りのおあ〜書お〜と〜る〜いひんを
いひ〜け〜

あ〜あ〜若の名〜け〜と〜

目のひ〜い〜あ〜の〜い
主平の云按をいひ〜ていひ〜け〜
〜い〜あ〜地をいひ〜と〜いひ〜
我とありあ〜と〜いひ〜

やそしやまてくうほりめさる地と水
大と風らうめ〜ホウくさん
ら〜ま〜^{ヒツケ}眠てま〜んおし〜み
ふおあまうらう山せこのから
あまうらうと影と我そと思ひそめて
まのこ〜後^ておされそてぬる
あふえらうなるこそ~~後~~ま
り〜んられそのからい〜

随分延信

徳治二年戊申五月廿日 毎伯八十二歳

懺悔せざる飛の事

百喻館の由じ〜思つる男あつ〜人の聲
よ成て好〜ふさゆ〜もてなせ大死信と
てあもらる日よはけて版すま〜てこゆり
りるふ書あが用乃るゆりて録ま〜入る
まふ〜わ〜ふゆりゆる書とる糸を一
おらみてらえとぬる如ふ書あゆり〜とれ
て知〜るて影らちあめて居とりし
ふ影のそれて見〜るは〜と問われ

すれどもさへいふくつしきもみられ
それおのよりそあもそれぬやとあひ
て又およつげていひはらぐくしてあよ
りもあはるるをすくしてあはる
らむうていふ根なるをくたしなくぬ
く影をを赤く成てあをさされて隣下
のちもいねえはらぐあうて聲年友のされ
もの、人さかおはる由縁あはるるを
とあはるあもねとす可いあはるる
積りするのあはるるをせしめ
くえせられいひあはるるをせしめ

ゆゑあはるのあはるるをせしめ
ハ余ゆや〜として入るる大計を
を焼破〜〜〜をせしめ
ゆ〜いひあはるるをせしめ
人があはるるをせしめ
む〜いひあはるるをせしめ
ら〜いひあはるるをせしめ
（お人のあはるるをせしめ）
あはるるをせしめ
〜いひあはるるをせしめ

す物もさへんさへ〜 何つ〜 音もなれ
それおの大方もさへもそれぬわとさひ
て又おまうげてさひみは〜 してある
りもあ〜 して〜 して〜 してある
さ〜 して〜 して〜 して〜 して
く影をを赤く成てあをさされて隣
者も〜 ねん〜 して〜 して〜 して
の〜 入りかお〜 して〜 して〜 して
と〜 ねん〜 して〜 して〜 して
積も〜 して〜 して〜 して〜 して
〜 して〜 して〜 して〜 して

ゆ〜 後大子のあ〜 して〜 して〜 して
ハ余ゆ〜 して〜 して〜 して〜 して
を焼破〜 して〜 して〜 して〜 して
ゆ〜 して〜 して〜 して〜 して
〜 して〜 して〜 して〜 して
む〜 して〜 して〜 して〜 して
ら〜 して〜 して〜 して〜 して
（お人のさ〜 して〜 して〜 して）
〜 して〜 して〜 して〜 して
〜 して〜 して〜 して〜 して

われ共と云ふ人の強く小由りせて或る
酒色の歌おゆられて君父おふ忠ふ美ふ孝
をもけしひ申年かして子孫おふを信ん
と歌して合報美紋は玉近知智を以て終
つてま子孫を二豆切ても終るまうあま
しつて鳥君父の忠孝を分るの意と
力の軍後勤の徳の用さのふに心おふ人
かゆし

乃前ら岡梨身の変

むう一をふら扇るまう人侍お司のト司ま
りお使してねくまうは又もいして

そりらるがび又うさちんらる心さゆな
をさゆらうりれ人の見るもおりて
かやあうさうさう海はあし
つてころらるをえら人のあうり
後まらうてさうらふその忠孝をゆめ
鳴らうらるあま七月十ちらうの
七又おがんとをさうとていさうかりらる
たれらうさうらひて

あまの海は親をあられてはぬの
あまのうらるらるはれたりらる

孟蘭盆經曰以百味飲食安孟蘭盆中
施十方自恣僧と云事根元曰孟蘭盆は
梵語之倒懸救苦と翻譯寸俄飢のと云
と云ふとさう根かけられくんやく救
急はけ俄飢の苦を刑さ急く佛子目を
る若始て六通を得て舟乃左不とんふ俄飢の
中ふるくく則釈すは得てい苦くを
脚こころを解がいけせは七月十日自恣の
佛を依ませし解脱すと云後り
孟蘭盆を立たふくと云道令阿闍利は不大得道

徳の男とて天まの別者と云々詞花千歳等
よとて十代の集の化を傳え給はりあたり
蟻通明神の由也

蟻通明神を和名也和名也不能言す
まの紀の卷之夜中集行てるの記也

西名の由ちまるれる夜中なれ
つらとかくとと云くくくく
と後てをりなれはそのる欠起て歩めり
とら闍明神へ傳てさる人の苦は神也

あしをわたりて

せまひかぶらえりお乃路をぬき

ありおととく知しはあらん

と示現るしとくゆれの席さうやあかあり
二月半のふと勢極のやくとあしと折の
いよの本末を尋ねてけしおゆりの中
とやのを又七句除なうゆるふ中ゆられ
りれいよがれゆく極お打入てぬりて流
方未なりとあしとゆるゆるおるしとあ
後お又二月半あも蛇二足は唯様あれは
しとくゆれ又老又よなれはこつぬく

尾の名入知しはあしとくゆれをよこら
を女と知れと室小洞のこくゆれはあ
てあされより又和徳てせつとあ
の中通うてたあおとくゆれはあ
紙て是よゆと返して流りては
を又彼を又よゆれはあはあ
極して極おゆとあしとくゆれはあ
とくゆりつけてああこの口おあをぬりて
とあしとくゆれはあはあをぬりて
後よはつとくゆれはあはあをぬりて
とくゆれはあはあをぬりて

されりる果あふもそむるを思れりしとされ
ハ七日の神詠は老父と宗家とそむりて神号
なり

信公御病氣使後の事

大猷院攝清代出前以の山名中坊田かむ守正
慶之を病大切小舟二家門葉の面々後々を給
醫者療新於か指去信子信名醫難かつてさ
し、除あくくを信形し、とすふ達し、
先ハ石使のりふ思われ具ハ山名あく古住れ
老臣の美山なごつと信くは山名信家御
威振舞ふ山名の家後を大切し舞らるる

信のりふ中 星をを思あく清出小信
マは成るふと意、如部あり存信中上信も
其山名をこの清原君力よ余り信ハ何の
中上交之の信、信山信々中内世伴と信外
小扇子信乞信極ハ判君と信極之の信之
山名とあり

信公御病氣使後の事
扇の風ハたしく

と信極の信守を山名信々信々信々信々
くえそれし、信極の信守を山名信々信々

とて佛徳俊清威光仁神の威意有る
こと分る事禁よのくはるる

信亨の考据の事

崇徳院御清代寛文年中東宮ふも
さ星おるは清高御清徳

松のまのちしうかぬ代のたぬ

おれおれにのまらる

清派の威徳せよ

武延中をらるの茶対音田丈のし
孫一なる由いりてら

因まわ意乃各亨の申まて
おせりよとら

武延中ふ新とい花らるはれ
あんでぬれりいといれぬ

後尾院御製

世の中いど目うつさ替りけり

まらるのまのほまのま

人のまらるるまらる

まのまらるるまらる

又代志を述べ

人毎に...の...の...の...

歌...して...と...

世の中...も...の...の...

何...人...月...の...

清水も...水...の...

す...清水子の...これ

...を...の...の...

...の...の...の...

水係奉時徳行の...の...

論語...の...の...の...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...

...の...の...の...の...

世をおそれ...の...の...の...

たわつ内跡は造代をさしめしむる

魏の任たふ事

魏の文王ハ智仁勇義徳つらて魏の事平あか
て隣国の佐作もちうとあつらひ親し
睦も人よりをのこしむる或は大任たよ向
ひ朕ハ賢王ありやと聞かよ任た中らひ
よこ任は徳つらうた賢王よこつら
すともた文王あよお達して予子細と
つて天のさふる任をこしむる賢王と
中電君の徳つらうた賢王の
さふる任は徳つらうた賢王の
さふる任は徳つらうた賢王の

とよる人々のさふる任をこしむる賢王と
中電君の徳つらうた賢王の
さふる任は徳つらうた賢王の
さふる任は徳つらうた賢王の

小栗又市夏

大坂清浄後久世に曰命改期辛酉を百て五子
石つてなりを治すは使中女小勢又市を白て或子
石をトくしし一老も清浄ありて之を新なるを
清浄して近き又市を急いひ或子の教へ申人よ
つて信たす如小初行すもふとて信たすは
所信二人をわすれして可相果と存者ハ何
りこそ初行多ぬ所然されしそ能く
又市の中を又ふと申辛酉年といふと
是よりとて教へし中は所信ハ是那を記して又
市をくふ若き其の後は智恵遠く其言るの教
と事ハ所信の如きとてしとてし

五百撰卷二

目録

- 本多上野の事
- 信長をたぬ徳意の事
- 學子老も其の事を知りたる事
- 関子寒も知りの事
- 魯も其の事
- 愚痴は仍て人の事
- 和泉式部を布衣をける事
- 三圃の事

三

夏百撰卷二

本多と野介夏

成瀬貞年人面々中じいお夏苦力と記評あしを
 の我ホも尾張は系山本多と野介を久安つと春
 て智小一り二つとさそくで九つと、いお夏人とも
 悪人あれた十と目小人あそくれさる処所り
 是もつとて乃軍務は多もい九つととも所
 とぬ内も身代滅をせぬといが心えあしと
 是もい集人々安来の心九つとともい
 此もいつとあれよと格現格を中存ふれと
 いもいさし十月を比用らぬといあしと

之権現様ハ... 又佐渡守... 七千人権現様... 加増... 方多... 之... 乃... の... 時...

此... 此... 此... 此... 此... 此... 此... 此...

大坂... 中... 此... 中...

か治後成敗と云ふれと云ふ人てもふ
死りとも治事と云ふ事いふ和承守作石
り〜と云ふ中い治作事自石梨が武
考年いとは中として名後いともめんのお蔵裏
の傍に文のそかと侃らまふと云

信長と國造との事

権現様は後河内信長よりを名を信長は治
の時よりと國造河内大國よりいふ事
おハ権現様と云ふをい治河内信長少い兵
いして治河内の内人と云ふ自身力い
いふ事

を治すも不なる有は長條よりい細おの
いておのり中いある事いふ事
是ハ長條より治事と云ふ事いふ事
信長をい治事と云ふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
けいりとも治事と云ふ事いふ事
四月十七日治事七十五と云ふ事
て治事指いともせられれと云ふ事
月野より治事と云ふ事いふ事
いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
先いめ治事と云ふ事いふ事いふ事

まよきも母のよきを知らず

中比甲斐のふに岩倉がうらとて庵をひら
りありのつれの大さう路仕もやき
るやんこふふ信あさう学通る石修の
ゆあさう仕をさうて同する石凡る院
おさうゆたうあさうれりるをね短
ていりり流す法師を修け若し
りて朝夕の来れおとさうてあさ
は湯のほつさぬれさうあさう
さうあさうおゆけと我はあさう
とて答をさうてさうてさうらり
そのさうらり

をえんしとて流後をさうてさう
のさうさうさうさうさう
おさうつれもさうさうさう
さうさう人の妹をさうさうさう
らりさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさう
とさうさうさうさうさう
人のさうさうさうさうさう
けてさうさうさうさうさう
あはさうさうさうさうさう
おさうてさうさうさうさう

魯の孔子の門人之子乃中ふ十人の名は十
哲と号する曰は天子を尊ぶ孔子の曰は母は
先父を尊ぶ成るれや後書を述べて書ること
てぬその曰は後書も又二人の子をすに
仍て徳母天子をすくして天子を尊ぶ我
子よ孔子の徳を名は入つてこそ実なるは
の徳を徳やしてこそ孔子を尊ぶ
くして父をすくして母を尊ぶ人か或は
見つけて父をすくして母を尊ぶ天子を尊ぶ文
をすくして天子を尊ぶ人か或は
かすくして天子を尊ぶ人と成る母をすくして

かすくして天子を尊ぶ人と成る母をすくして
子たらへき中をすくして父を尊ぶ人か或は
人して天子を尊ぶ人か或は徳母心をすくして
ためて我実天子をすくして天子を尊ぶ人か
ひんかかこを成人の後賢人の名をばて十
哲の曰は又曰人か或は天子を尊ぶ人か
中むるは後書の人か或は天子を尊ぶ人か
の曰はれらる女をすくして天子を尊ぶ人か
けりて天子を尊ぶ人か或は天子を尊ぶ人か
は後書に記して天子を尊ぶ人か或は天子を尊ぶ人か

しをうし〜ちかす〜らう〜らう〜と書
あ〜するものらなまをいまをさるわあせ〜我
い物とち中をよ〜ちあ〜りなれいせん後の子
もよのいん戸原のいふふら〜とて母のち
え〜んませげり母いをもさむて肝魂も身お
係らぬ解ぬ〜いよせはらうとあそとあよの
つぬのおとつれの井のやうに和〜けてあ
まこの井をよ〜りれも人の後まあ〜とを
て移人比〜まのせよとては〜ぬい〜ま
余りふ研をさひて〜いけ〜た〜とては
そむものなそ〜てめを〜ら〜い〜らふ

あらのあつま君様よう〜る丸は橋
ふ〜ん〜子さあや〜ら〜と
とまやうりれい〜らふ

えかのあつまのあ〜もあ〜と
えねも〜あ〜とあ〜ら〜ら〜と
かの園子寒ふ似〜成人〜て又のあを
つらてあ名と〜や〜ら〜と

あつまのあつまのあ

あつまのあつまのあつまのあつまのあつまのあ
あつまのあつまのあつまのあつまのあつまのあ
あつまのあつまのあつまのあつまのあつまのあ

小やとりぬれその時いじを女又の口りうらの生
 甘茶をいさあいてあふあふるるあーある野人
 おやとりぬれてえかたかあまなうひあは
 又おやとまりの人そのおとちやくちやく
 してあふあー死とまあのをともあつたりと
 双方をたごめてゆーぬえおの子ゆうてい子
 をすて口かーいひを母あをすくくー
 とくとなりの人と殺さるー門をむくさく
 ちやく過おけりくくさゆと家お併みえ中
 ちやくおとあかといがかー我を殺せし老人と
 ちやくおとあてあれい二人の子は科あー

己れ子よあへるあなれい我あふ外はう我
 を殺して二人の子を助し老人と中視お
 此はれおあ女たはけて二人の子は肉
 一人を後さるー但あう何よりいしとてあ
 同るあちうのあを百捕てえとあ助らるー
 とち王の同人お親の子とああ多しといさけ
 あれをまを何のあおあを移るるとあ
 ちあちうのあひあ成の子とえい絶子とえとあ
 命あちー百我子あちー三月むしーちあ
 ちうい何えれ絶ちあおあをすてりえ

飛入るに存力の言を聞きしはわれは方と云ふ事しす
と申すも大に感しつて一門の内におくはれり
一門の内におくはれりして二人おるは百はれれ
も曰くは後言はれり

西條小笠原家の事

洛陽の事しつてはかゝる事しつては
大なる事しつてはかゝる事しつては
心する事しつてはかゝる事しつては
その人の事しつてはかゝる事しつては
をもつて我々の事しつてはかゝる事しつては
と云ふ事しつてはかゝる事しつては

右様のことしつてはかゝる事しつては
と申す事しつてはかゝる事しつては
人の事しつてはかゝる事しつては
らまらるる事しつてはかゝる事しつては
又日の事しつてはかゝる事しつては
るを人もつてはかゝる事しつては
て人の事しつてはかゝる事しつては
袖をとりつてはかゝる事しつては
さうしてはかゝる事しつては
さうしてはかゝる事しつては
記余りおる事しつてはかゝる事しつては

比の電もおもてまいてはさしつかさおめて知人の産
 室へ行つておまゐりてふゆゑのちやうあつて
 殺せしむるかと考へてはせむのほせをいそ
 ねり邪ふらふまゝやうかしてきてまはの
 切をつゝあり或時月夜おちつた心もあつて
 思ふれぬやうにうまうてもはなれたる同族
 いうまはなげこゝろや我もはゆゆ中へくは
 ぬしつれし中殺れし怨のあらうかゝり
 ぞひらひしむらたまひにむらうてせまうと
 ぬのかちひひるかひは出らぬやうにしては
 我も怨のあらうとてはなれたるの怨もあつた

終つてうらみとくはつた怨因縁のころまかり合
 ていふゆゑにわづらひれし我も毎く
 中さうとせめてはるもふえけぬ怨の滅
 ぶらうとせむと色むもつゝいふとくは
 て女房おすめられてはひのかたきとせ
 といふとてはらひはかたきとせられい
 つのひのころあつてはり又お袖の色も
 の袂もあつてはらひをうの佐よちられ
 入るををせしことおてはらひはかたき
 残すところありはらひの女はあつた
 かれはあられたるひのちやうあつた

お家しつれかきも極る〜いりてうんは
修行的のかしらと成るおまひ入極さやお便
からのちこいを吊ひたはしけんとしてまよは後
をまよ〜さつとありひて月日をあくり
り〜ちよせよしを〜いよ月を極り〜たそ
の指し〜さお銀た〜入て目行と成ぬ
殊勝あり

和泉武敏も布祿を創る

和泉武敏中年の以平井の保昌の事〜成〜
お保昌ありままとお便て成るう方があり
かなりゆるとなげ〜してあるよ〜いり

いして書^ま布祿よて電敷のまうり
その身も糸〜けるを保昌親あつうの
和泉本をけふま〜れてう〜いふが年
だけたる丑系三帯を〜そら〜そのめり
をさぬ〜お便〜してまよ〜後〜と打ち
のう〜を〜してな〜て〜返極ひていぬ
りよせよせ極くと〜成る形らうちをめて
返るのよせよ〜れは是祿の出たりの出折念
か〜は半成てなされぬ〜や〜し〜せ
ふと〜は〜い〜お〜ま〜ら〜と〜あめ〜る〜は保
昌は〜あ〜〜と〜あ〜〜て

かたがはの年のふる日もなごしや
あそびよとしてあそびや終つては

と休して武アラムの目もなごし
かれも保昌をよらるとまじりて引つれぬ
てらさし候しとさしと

俳句あそびの事

正徳明暦の頃北及古の中ホアチ夫はりて
俳句の身もたねなる中ホアチ團(丸)なるた
りし 蓬子軒の事也

蓬子の毛のりをほかりり尾姓

新築のあそびのあそび也

新築のあそびあそびして菊の酒

子成とじて

女房の子よはれられられは縁

いかにあそびたりりれれ中ホアチ也の
記し

及古撰巻二終

寶曆六年子年文月廿九日
武陽西赤坂今井右似伯内御早生記
業日晦日成功也持疾者年安地或ふ
ふ年常と銘々

正白忠茂

反古撰卷三

目次

本多保山物語の巻

村越通伴志の巻

畠山保山れ巻

三坊の巻

三坊犯戒の巻

以上

反古撰巻之三

平多保山と信一と

平多保山と信一と 権現権舟比限指の

時平多保山内安友と信一と 成成小石

村越茂女と石連江戸比野中平多保山

平多保山と信一と 大保山と信一と 安友

身比大保山と信一と 安友

平多保山と信一と 安友

安友 石の面と信一と 又権現権舟表

27 清和の時、高尾丹後永井台迎、是時、清和
相借、中園、京師陣、北御、大老、八井、侍、長、相、捕
柳、京、式、部、右、補、本、多、中、務、右、補、清、和、老、酒、井、屋、尉
石、川、伯、耆、守、酒、井、子、而、天、中、之、節、侍、本、多、山、屋、
子、刀、持、左、馬、大、久、保、七、而、本、多、右、衛、守、本、多、
上、中、大、守、改、人、八、加、八、年、人、子、子、九、能、大、久、保
十、侍、侍、系、能、我、板、倉、四、節、在、八、加、友、在、左、中、の
中、
台、任、院、極、侍、在、中、
大、久、保、右、衛、守、酒、井、敏、康、本、多、右、衛、守
子、山、右、衛、守、月、方、修、理、屯、上、井、大、久、保、
中

安友對子守 三山書

後、院、極、侍、他、界、江、後、井、上、右、衛、守、永、井、信、忠、守
子、山、大、守、酒、井、敏、康、守
大、久、保、院、極、侍、酒、井、敏、康、守、子、山、伯、耆、守、月、方、
後、守、酒、井、敏、康、守、月、方、修、理、屯、上、井、大、久、保、
後、守、丹、後、守、上、井、大、久、保、永、井、信、忠、守、子、山、
大、久、保、右、衛、守、酒、井、敏、康、守、子、山、伯、耆、守、
子、山、對、馬、守

天保十一年

三浦志摩守 石田物中守 土井重信守

酒井物中守 杉本良和守

安房院市守 中野中守 北平和守

河野中守 酒井物中守 北平信守

酒井物中守 物中守 久保大守

天保十一年 土井信守 板金信守

石井信守 永井信守 石田物中守

一 台 徳院極三田中兵衛の対七本徳の意

中山物中 石田信守 近右衛門 相倉守

信田守 小中守 戸田守

徳信守 石田信守

石田物中 徳信守 石田信守 安國院 徳信守

の如き信守 徳信守 石田信守 石田信守

石田信守 石田信守 石田信守 石田信守

石田信守 石田信守 石田信守 石田信守

石田信守 石田信守 石田信守 石田信守

もよおがしるれは古の事いひてきては
くはつておほくともなふむらたれ又曰
幾場のころにStomachin——国をよきて
いふこのりり不自由又後か——
そくくす武藏中の得ふるおとてに
長くいひておほく

村敷に付寄の事

彼をよきこととよきことこのと中たり
うひひいさるるとそ大改くも月せよは
とらひいへ地城もねの丸うらへは
も城内は流尾は十部と中後絶るに後絶

七宿板がしるれは十部不送人のをけれ
長足懐たの内送人をいへ令書中御言あ秋
の人取を和の丸うらへはは流尾は十部
う部の中小をふりう部東一味和の丸の丸
流尾は十部是れ大西の丸はも守居依中肥後守
も大改をいへ送依んは流う居くも西人多秋
のよく生捕りいへも御人へと斗られたれ大不計
西人多大改いへは流尾のいへも御人へは依ん
流尾の御御死の面はそのよき各と石おは
不西人多大改いへは流尾の丸はも守居依中肥後守
丸はも御人へは流尾の丸はも守居依中肥後守

通電のりも知れりしれハ新江州は有り
御運心かく大坂より後修明自のと後年
を子ら百おけり関ヶ原大成も具ふその夏
紀せり紀錦廣くんさる人のあむの死生ん
さる何何と智るり

関ヶ原大成
いた美悪果あり

白山保山お借のち又

小和申物な海井空車の上ふ山終平元小
もの向こも能く情とけりは百信の大谷を
ゆさうれ時おあさふ身梅のこてり
うふ威さか後中我おとてもたの時

とハ智り申人こあハ持難さ物とらりるを
事大か感んらさしう標も信老ゆかちの
元由くまこゆたを周と修補のち合ふ
持現杯の卯いそ人も見ゆふ中ち園かちの
後そまも多うりか一人も多あ物のため
かハ成るな中申物な海井空車の上ふ山終平元小
物よ小合もゆたを大佛造管ホも合ふ
の山若あそ多ゆ入用合子佛底ふ成大坂
城内よまこも銅を後友極平ゆ中ゆを大
佛判とそをりハ々の石けお人祖をとお場

民部と商人と民部は大小は別哉——大坂
てふ事ののりては切敷——と

一六 坊々事

京都金町は有任の町人倅——一人を——
ふゆふらとてぬる徳十七八はた二三は
ら——ゆら徳十七八はた二三はた二三は
味もあ——徳十七八はた二三はた二三
か——たれは又うね——みて一に赤きうさ
まえんか——たれは一向用さるる人な
まをふが心成さむりお業もお候は
一お業お候は後のと年ある——遊

うらね——秋のま——朝夕の涼風もよ
て知る人もこの秋のゆきあたらしき
らまへんよ——日——く所詮人知ぬ
行つてとあまか——も自れとお
とあひて何およららてもあはれは
をさ——て山家の名も新く日よ夕陽
か——たれは又うね——みて一に赤
ま及こふな——けか——り袖——
あまはれらるるも我もね——人
もあいら袖はあまふも——
くあつて人あま——者——あ

けふ春唄つてきれもいかに花さかむのよりの
つれにいかに暮るかまほしくもいかにあつたに
の後ろ座敷をおりてせにまゐりしなりん
ちよーとぞおとけて体こけるお春中より
あやうも〜つづれきたやまはつりなれたく
るごため〜いれきたやまを〜なげれた
らのごときをよてなまのすかりは〜り
ごちかて初〜づの〜いさ〜なげり
西の若みれ春あやうきのよとな〜り
尾も〜れふぬれ〜袖の後も〜り
情我を〜り〜ふけ〜るの〜り〜

もよるのゆい〜り〜と〜なげり
あつた〜と〜あつた〜り〜
西の若みれ春あやうきのよとな〜り
のまを〜り〜し〜と〜なげり
と〜り〜も〜と〜あつた〜り〜
り〜り〜〜花さかむのよりの
すま〜も〜と〜あつた〜り〜
〜と〜あつた〜り〜と〜あつた〜り〜
川を〜り〜と〜あつた〜り〜
あつた〜り〜と〜あつた〜り〜
あつた〜り〜と〜あつた〜り〜
あつた〜り〜と〜あつた〜り〜
あつた〜り〜と〜あつた〜り〜
あつた〜り〜と〜あつた〜り〜
あつた〜り〜と〜あつた〜り〜

二年の程二八年なる女のたゞ、独りすむ
 ときていざこれいづかゝる人そと問ふれば
 られたるのむじよおんたる、あめひけお作
 びまじつしよとらにむけあふまゝと連
 かんむれおんむいづかゝるむらつらなる
 来々々々々々々々の身おれ、紙はくも
 なるして、あふひもき、何れぬ母の表
 知りぬか人か、いづかゝるむらつらなる
 たりぬか、いづかゝるむらつらなる、
 やういふいふしたと、那の葉はのおくも
 もおろしと、いづかゝるむらつらなる、
 我も

ちと、いづかゝるむらつらなる、
 り折、いづかゝるむらつらなる、
 さくも、いづかゝるむらつらなる、
 むらつらなるむらつらなる、いづかゝる
 らつらなるむらつらなる、いづかゝる
 れは、いづかゝるむらつらなる、
 けふも、いづかゝるむらつらなる、
 地ふれ、いづかゝるむらつらなる、
 さな、いづかゝるむらつらなる、
 を、いづかゝるむらつらなる、
 女は、いづかゝるむらつらなる、

ふ六所半ばかりと云くは標ついでに
めからふかくれ作をさげも年毎に
秋をたしとてゆく國よはとやうよ
色多くしめくはくはくはくはくは
なうとて男の義なげふせせと
おろしとて福屋の國よふけふ
初ろしとて海にやうなと云くは
たは家の娘もくはくはくはくは
うなとて人嫌し月がくはくはくは
秋のこころのくはくはくはくは
さそれの男むはくはくはくは

こころの女内よりをさえてりしれ
戸のくはくはくはくはくはくは
秋のくはくはくはくはくはくは
候やふとやうのくはくはくはくは
さそれ海にくはくはくはくは
かいらふ秋の香れさ香を二つたな
て菊もきくはくはくはくはくは
ふとめかたてとあそびひらるる
さうらぎふあつたわらわらわ
らうらぎわらわらわらわらわら

さういふたつしつしつとわうる人我命
おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命
おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命

おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命
おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命

女

命をいふとらうしつしつとわうる人我命

おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命

おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命

時移りゆくはそと父母をよびてはあつしつしつとわうる人我命
れぬおのこをいふとらうしつしつとわうる人我命
てりしつしつとわうる人我命
時つれておぼゆるとらうしつしつとわうる人我命
ぬ胃血の液をいふとらうしつしつとわうる人我命
をいふとらうしつしつとわうる人我命
おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命
てりしつしつとわうる人我命
見すたはれぬおのこをいふとらうしつしつとわうる人我命
おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命
おぼゆるとらうしつしつとわうる人我命

めすびを迷ひしめて悟れぬ程よたふ
うされ加藤よめれはしほ繩を海で眺
まわりくしんこもあつらちるを祝のえ
まうをうむりらゝるしやそはふとれ
てういあつめられたるをうふ物もさ
あつて悟れし中ふ年あたるかやらる
祝の御書を信る程よふ節のあつしけ
れた我よむひて何のよもなをを教えん
いふ言の教生あり只を信よてん持久とて
堂の由よ入て我代受書若不正覺と禰
てそゆりりる男いじんこのつれあへん
えろよむてしげふんこのえひしめはる

も祝の御書あるあの日何とぞひかりてはて
た後おはさけりたをなうりりやまはる
ううう信ふ持れし後實信りて
うりやる方るおめのみまむしおの程こそ思ろ
しけれちりり日もまを月のお光い
あつてしと後いれとつあつてしと地獄
れらるしと実ふ者し祝念よはのれ果つた
うむまに信り者丁人あつて是のいらる人の
成りなそふ使の御書しとふ始りて
まあふ信りけれえとさうくの徳と
あつてしと後いらるあつてしと
うとをて同く今は祝り書れを喜悦

の持と——ては傍のかきと成て仔あやうても
ほびて任いなる——つや——ついで——はる——つ
繩と——つゆい——地花書讀の侍あ——つて髪と判
持悪人をさるる——つ——つと名を付ておつ
そは書をつれりえ——つ——つ——つ——つ——つ
——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
小庵をを路ひつて——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ

一二坊紀戒の事

從く——つ火の付あ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
ふらら——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ

とひな——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
か——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
とて——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
て——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
り——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
も——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
る——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
ゆ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
あ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ
——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ——つ

こゝの靈照女は、和道一の志めと信惚り
を以て、こゝろこゝろたるため、もほほのきこふ
入せねとく入せりく、な耶こゝたるを安くね
けり、中とり、西方極樂浄土に平身候と
願ふ、こゝに候ある女、男よて、いつて、歩み
し、い、佛なるより、な、ま、わ、し、と、中
るを、給、り、な、れ、た、な、ま、を、う、す、の、く
も、な、あ、ら、れ、ら、は、所、知、れ、な、ら、ん、さ、し、こ、を、浄
と、な、れ、れ、も、え、い、れ、生、之、生、も、又、れ、之、候、ほ、そ、く
あ、ら、あ、れ、い、生、佛、と、い、は、身、の、り、い、ま、信、を、馳、け
た、ひ、り、く、と、候、の、り、も、な、ら、ん、さ、し、あ、の、浮、世、と、知、ら

〜人と逢ひ、教へむ、〜 それとも
口をたぐ、証と指さひの詞、未供、な、ま、ひ、ひ
そよ、い、山、本、さ、い、靈、仙、を、あ、ま、す、を、書、の、ま
か、通、を、さ、し、て、山、男、の、り、あ、と、な、る、の、ま、い、れ、せ
た、く、と、中、や、い、女、け、い、も、な、ま、内、は、は、れ、も、む、〜 記、地、い
い、我、袖、の、一、粒、の、り、〜 信、人、と、候、お、ま、ひ、の、む、〜
け、晴、日、の、花、の、ま、ら、の、候、に、候、り、合、由、い、我、男、の、ま
不、善、の、山、の、ま、ら、の、り、〜 人、も、え、る、な、く、い、さ、し、〜
ま、〜 白、川、の、り、〜 ち、〜 ね、ら、な、ら、つ、れ、い、人、〜
い、我、の、浮、世、の、つ、か、い、と、む、〜 山、の、り、人、た、り、は
〜 信、と、候、と、な、ら、ん、さ、し、の、り、〜 山、男、と、候、い

も知す人たる者の乃よ罪すと稱てんぞく
古々を存する我身の縁ぢ成りぬるごと
いふのうき何事ありやんたはら
あつたやんやんたはら
何うしてははぬおこめくしてはらたふ
入つたやんやんの縁ふりれんやんやん
しよと父母及大母と以後はむむと
足ふつれゆり子たをる見たりまぬいと念ひ
つらんは月を度るふ子たともぬ年七歳は成
こ年あまたふちのさくしよと父母をば
福あふのなやんやん縁あつたやんやん

いふ連しては母をいふはらやんやん
たやんの縁ふりれんやんやん
十一年あつた二人の子たの縁ふり
てはあつたのうきやんやんやん
いふはらやんやんやんやん
何んやんやんやんやんやん
たのあつたやんやんやんやん
はらやんやんの子たふらやんやん
ふよ今や月年の縁のあつたやんやん
あつたのうきやんやんやんやん
知れなやんやん

反古撰卷三終

反古撰卷四

目錄

板倉園瑞寺の事
船の事の事
蝦地と事
猿母を事
寺傳地所に威任の事
只物傳の事
兎天物と事
荒紀年と事

る病に能業のきん
用のやあらし

仁上

及古撰書也

板倉園陽寺夏

板倉陽花、禁中にも大猷院孫も法問の孫なる
夏のと成、或時大猷院孫の孫の孫なる
小介の夏く、種りそり、をそり、をそり、をそり、
同姓内孫なる、庄やと、松平孫、をそり、をそり、
孫、をそり、をそり、をそり、をそり、をそり、
板倉、をそり、をそり、をそり、をそり、をそり、
の孫、をそり、をそり、をそり、をそり、をそり、
近、をそり、をそり、をそり、をそり、をそり、
同人、をそり、をそり、をそり、をそり、をそり、

今更不可代出此成主任合よき存の保一
張多美比者にと申 仙洞極より何るもそを
や枚年入切にお初申事抄んを死根お成つれ
りも此作ありとて六和を主の因に 仙洞極をを
なす一書り人と存故のて一回と 延川仕立
私致茂の因より無比致口の 不長成の是半抄多
此中より由致申後守所代に 何れも其防
りも此何りん故よつて 成成りりりりりりり
ととらけられ防 石中列の更もそくは右
町人よたまされりよ 不片腹とよよ 家人を成
仕りつ後美いつて 此初と申中

防君の死罪に極りりりり 若も若日よ 何日
飛龍の中身と道りりりりりりりりりりりりり
と申中 後又望 神ありりりり 飛人 遣を中
何れにめりも十日ものごとく 寄 聖 致されも
紙更えり 何れに成 致 程よと 飛人 中
名 殺 中
台任院 極 代よ 不 同 名 女 報 緋 海 井 河 波 子 若
流の 時 志 以 之 年 女 中 書 の 其 河 波 守 方 一
今夕 出 之 若 中 若 一 中 を た び 中
り 一 た び 中 を 一 中 を 一 中 を 一 中 を 一 中 を
よ 一 中 を 一 中 を 一 中 を 一 中 を 一 中 を

聖旨并し甲政承弁任徳守を以ては守徳を
しり皇女夏又那由忠氣の内よりはあまといふ
は實忠氣よりしり中は忠氣よりしり中は
折々相任らるるは相任りえきまふ人な
畏るは信の処板倉守名中ハ折々相任らる
りハ折々守名の子由忠氣と中は忠氣と
若れ出さるるハ折々相任も信り若くは又ハ折々
相任り信に付ては神より上下一概より
夏よりハ向後守名ハ折々守名ハ折々
相任り信よりハ折々守名ハ折々守名ハ折々
て折々折々相任らるるは折々守名ハ折々守名

ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
起りし折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
左折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
城入て中折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
中折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
中折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
中折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名

古任院様御不例申の事
折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名
折々守名ハ折々守名ハ折々守名ハ折々守名

けれい子の居ころどおの居をを有なりけり子
 をなめ給よりけりよんてをそと取はて
 髪を利てお糸一は糸の折ありて成て
 ぶきよ強しおいおしよんて

能也とてしと夏

中一とてしとてしとてしとてしとてしとてしと
 におてしとてしとてしとてしとてしとてしと
 の能也とてしとてしとてしとてしとてしと

中一とてしとてしとてしとてしとてしとてしと
 におてしとてしとてしとてしとてしとてしと
 の能也とてしとてしとてしとてしとてしと

尾のちこそい小蛇のあつては〜小蛇はさといふ
さつてか〜と〜てききうて〜のち家丁
と〜とら〜とれと〜ふと見つけらる
時大蛇我下のお〜らぬを小蛇のあつて
尾のちと我下よとる時に蛇食〜けり
おとら〜とらぬ蛇のち〜人よと〜ん

信忠を知る事

信忠のちれ地改よ名さ人ら初〜ゆて格と〜
足揃〜て御り初〜格守を〜とそのお母
是迎り〜人ら〜ふ使なる事〜と〜て〜ん

やれとら〜たお母大人人のちを名れて
毎うされ〜と〜をさ〜たてお〜ん
ち〜そのは仲春のま〜な〜ふた
のちらち〜のち〜な〜は初のおよ色
〜ては〜る母〜〜け〜ら〜事
不使おえ〜て布の袋〜入〜て〜也
け〜と〜娘〜け〜初〜ゆ〜け〜ら〜事
ら〜の〜あ〜か〜の布〜入〜て〜又
のち〜り〜て〜お母が〜入〜て〜ゆ〜人〜と〜行
ち〜と〜〜て〜子息と〜て〜を〜ん〜也
と〜ゆ〜り〜て〜事〜も〜〜も〜は〜不〜〜格

をころさせしと死後をちししめりさ
なしくいぬ子のふしを捨て勅者
と申けりも子息もいと依にて
延後を申て今よふりていふ
まろしとせけふも猪ハ長壽の
の髪をたれりしとて後歎の申
うしこころ

も勝泡尾に威任の夏

尾石島目すの道よ十の斗なる
甘茶をつらけるがよふおれ
而も回をよめて居る男を
あや

とてかたりて見るとおん斗なる
つげも尋る立ぬれきて遊の
魚ひのや迎て足くは娘ハ
なるをわいていふがと
夏ふりうさ敷のふめ
作しをける石ころ
のやういふおんさ
ろとておれしけし
ゆとら男何そま
おれと云さうと
おれと云さうと

れいそ 諸院 房太の平へるより 出来て 元禄の
まじりけり されど 忍れて 途げの ことごと
ふ 一院の いとと くら 借人の ことごと
しかく くれぬ ことごと けて けり ありて けり ありて
ことごと けり ありて

大物傳のまじりけり

東宮の 行脚の 傳の中 こそ けり ありて けり ありて
又 けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
中 けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
まじり けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
ことごと けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて

本寺 佛の けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
けて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
忍り ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
つめて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
牌を ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
賞れ ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
あて ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて
けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて けり ありて

いふこれいふら——まわらば／＼かちんかちんさるる
安んずるてそましくわらわけきいひいふ——とわ
——つてさうあはれやちんかちんさるる
まらふは坊をんやちんかちんさるる——
あまむまひひかちんかちんさるる——
はれはちんかちんさるる——
たまりちんかちんさるる——
あまむまひひかちんかちんさるる——

兎の天狗よ——
作物の園いすの作おははれと行ひて人
ぬひはらふ骨子の兎はちんかちんさるる

いふこれいふら——まわらば／＼かちんかちんさるる
安んずるてそましくわらわけきいひいふ——とわ
——つてさうあはれやちんかちんさるる
まらふは坊をんやちんかちんさるる——
あまむまひひかちんかちんさるる——
はれはちんかちんさるる——
たまりちんかちんさるる——
あまむまひひかちんかちんさるる——

ふふえーらぬは依りぬ人なりーうまの
目もそき人かけらるる可もむおとえと
しきれとちふんをくけけせし
るお築紫の安樂寺とらぶちの中より
けしふ半午の世おそげなる老徳を
申の陣の場と見えーが所の思こく
て倒さるるけいしつらふ不格な
こふ居て見えよとておれけらる
そひて見え居けらふ山依り大徳
のしき指けらふおちりけり
とてしきけりしきけりしきけりし
とてしきけりしきけりしきけりし

おまゝて近人とすのふし
大徳おれけりしきけりしきけりし
炭灰お成てとてしきけりし
ことしきけりしきけりしきけりし
信所の山依りしきけりしきけりし
てつれてしきけりしきけりし
ゆけとられてたおれらるる
て母しきけりしきけりしきけりし
なと天狗とすりしきけりしきけりし
とれたる書りしきけりしきけりし

さうゆへいふたすゝまふたあへ組

荒鷲を撰む

凡そ後の身うへるゝのあまを影ひ黒周の
身よふ穢大穢を影ひ夏世とつちをれ木
左弓あやとせ世俗の法よ一歩入ふくはひ
介入入とらふさゝの影ひうへて天令下の
之影始とやうへて云下よあまを影ひ
とるく——とあま——て日天子こそ世を影ひ
しつふ極めてなげまこと思ひて朝日のお
りふよらひいて始と影ひうへてあまの
せよ頼ひなすく——とあま——と影ひ

せらるを影ひて極ひられと雲ふあまを影ひ
もなす女こそ世を影ひよとれと影ひ
れい穢とよひ夏世の影ひあひてはゆを
P小我の日の光を影ひうへて極ひられ大風
ま——とあま——と影ひうへて風を影ひ
ふやうとあま——と影ひうへて風を影ひ
ひてP小我の影ひあまを影ひあまを影ひ
極ひられ大風とあま——と影ひうへて
ひらとあま——と影ひうへてあまを影ひ
はらう小はあま——と影ひうへてあまを影ひ
極ひられ大風とあま——と影ひうへてあまを影ひ

いふにやむいぬのうらよも結れりて
て荒と聲のよきもりそとわかれ果敢
なるこのつと紙る氣ひのちてさし印
ふらむ

百病の事業の事

世に病を多ぐるの病は〜と人といひ
は用ひらむら〜と又いふ病を多ぐる病
〜と病といふと病は〜と病といふ
病は〜と病は〜と病は〜と病は〜
又そのこと〜と成人病とて病は〜と
病は〜と病は〜と病は〜と病は〜

〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜
たといふ病のやりの思ふも病は〜と病は〜
またも病といふと病は〜と病は〜と病は〜
またも病といふと病は〜と病は〜と病は〜
の病は成人の病の門は容疑及露なる病は〜
〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜
〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜
〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜
〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜
〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜
〜と病といふと病は〜と病は〜と病は〜

あゝ〜色をみてよめて出てわけとら女人の
〜〜とねとあふ〜〜我う婦なり〜
〜〜顔や〜また〜〜婦をと〜めが我をも
〜められ〜我をと〜めが〜婦をも〜めが
なとら〜〜〜人た〜路も〜〜又三
人つれま〜〜〜人〜と〜と〜
婦を〜す〜所〜妹〜と〜と〜と〜
されハる〜若〜得〜あるの〜な〜う〜は〜
たさの〜候〜に〜ありた〜〜〜
そ若の本ら〜と〜

國の火籠のま

伊豫今治 三万五千石

竹橋 三万七千石

大おのいと橋の音あり 松平 臺岐守定副

少り出さざりて枝多葉少き形く考へるは
いに今もそよ舞の音はかたに響くは
すまりの音をいふこころはし
らき河地をかくすは河地
きんきてはあきあり芝生北御み
我いとうとくくむらへ松古川の飛ぶを
の舟にせしめたるは船に舟をいふ
和 我はとくくむらへ松古川の飛ぶを

卷

そはつるふとみにしてりしに
ありてはねえのゆりし
かきとて新くはして見ゆる
川上川のゆきをみせし
いのかくのゆきをみせし
たのゆきをみせし
たのゆきをみせし
いと野老松をみせし
かきとて新くはして見ゆる

カケモノ
 袖形 襟形 袖附
 杉積 志位
 仕伸ス
 火伸 焼小色
 二尺
 三寸
 袖 おく

左水子

魚の群に柳子に水子...
 向ふ舞也羽根...
 袴...
 截縫...
 先世...
 仕伸袖形...
 袴...
 二尺...
 袴...
 袴...
 袴...

